芭蕉の『奥の細道』の日光の句「あらたうと青葉若葉の日の光」の推敲過程

赤羽学

芭蕉が『奥の細道』の旅で日光に到着したのは元禄二年四月一日であった。本文に、

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔、此御山を「二荒山」と書しを、空海大師開基の時、「日光」と改給ふ。千載未來をさとり給ふにや、今此御光一天にか、やきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の酒穂なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

とある。尚この日の実情を知るため、曾良の『随行日記』を挙げておく。

四月朔日 前夜ヨリ小雨降。辰上冠、宿ヲ出。止テハ折々小雨ス。終日霽、午ノ尅、日光へ着。雨止。清水寺ノ書、發源院へ届。大樂院へ使僧ヲ被レ添。折節大樂院客有レ之、未ノ下尅迄待テ御宮拜見。

終テ其夜日光上鉢石町五左衛門ト云者ノ方に宿。卷五式四。

一方、この参詣の折に詠んだ句が同「書留」に、

あなたふと木の下暗も日の光

と見える。これを宮に奉納したのであろう。

『奥の細道』によれば、芭蕉の日光参詣の前夜とまったのは、麓の仏五左衛門の宿となつてゐるが、実際は登拝をすました後にとまった上鉢石町五左衛門の宿がこれに当るのであろうが、この差違については省略する。また自筆本とされる中尾松泉堂本（平成八年十一月発行複製と翻刻）及びその普及版（一九九七年（平成九年）一月十四日第一刷発行岩波書店）更に自筆本の写しとされる曾良本（平成六年十一月十四日発行天理大学出版部）の影印本もあるが、殆ど最終の素龍本と一致するので本文は略し、発句に焦点をあてる。

芭蕉は日光を出た後、下野の黒羽に立ち寄り、四月四日から十五日まで同地に滞在して周辺の遺蹟を廻つた後、十六日高久の角左衛門方に一宿し、殺生石へと志す。十七日は雨のため一日逗留し、その日に日光での発句の推敲形を執筆する。その影印が『芭蕉全図譜図版編』（一九九三年（平成五年）十一月二十九日発行岩波

書店)に、

日光山に詣

芭蕉桃青

あらたふと

木の下闇も

日の光

の形で載せられている。この形のは、元禄二年四月下旬の杉風宛曾良書簡に、

卯月朔日 日光

あらたふと木の下闇も日の光

にも見える。これは尾形竹氏等編『新編芭蕉大成』(一九九九年(平成十一年)二月十五日発行三省堂)所収のものに従った。尚この真蹟は、『芭蕉全図譜解説編』によれば、寛政五年(一七九三年)十月十二日序の「茂々代草」にも「高久青楓所持正筆写之」と付記して収載されているとのことである。

ここで問題になるのは「曾良書留」の「あなたふと」と、高久家執筆の「あらたふと」のうち、その初条が芭蕉の脳裡の中でどちらであったであろうかということである。もし前者とすれば、後者は十七日間の旅中の訂正ということになるし、もし後者とすれば前者は曾良の誤聞ということになる。いずれにせよ、これは曾良の記録にかかわることで、更に考究する必要がある。

二

ここで視点をかえて、発句に独立性をもたせるために入れる助辞切字について考えてみよう。連歌の伝書の中で具体的な切字を列挙したのは救済きうさいの著と言われる『連歌手爾葉口伝』(古典文庫 一一三册昭和三十一年十二月廿五日発行校者并解説者伊地知鐵男)である。この書に「発句の十八の切字事」の条があり、その助辞として、「かな けり もがな はね字 し そ か よ せ や れ つ ぬ す に し へ け」の文字があげられ、各各に用例もつけられているが、それは省略し、その後付記された切字がなくても切れる場合に注目してみよう。

以上十八句に十八の字をあらはす、凡こそ・つつ・過去のし、この三字(を)意得べき者也、このほかに三切・大まはしなどあれ共、灌頂に云ごとく聊爾にはあるべからず、只此十八の字を分別すべき(事)肝要也、

この中の「このほかに三切・大まはしなどあれ共」とある「三切・大まはし」が日光の句「あらたふと青葉若の日の光」の構造に關連するのである。

この「三切・大まはし」について具体例を示したのは、二条良基の後を受ける梵灯庵主(貞和五年(一三四九)〜応永三十四年(一四七二))の「長短抄」(曆応二年(一三九〇)奥書)(岩波文庫『連歌論集上』昭和二十八年十月二十五日発行編者伊地知鐵男)である。

二十発句大廻ト云 在口伝

山八只岩木ノシツク春ノ雨

松風ハ常葉ノシグレ秋ノ雨

五月雨ハ嶺ノ松風カセ谷ノ水

三体発句

アナタウト春日ノミガク玉津嶋

此等ハ切タル句也、

ここに記述された例が芭蕉の「あらたうと青葉若葉の日の光」の構造と非常によく似ている。特に「三体発句」の「アナタウト」を芭蕉が意識していたとしたら、日光の句の初案は「あなたふと」であったかもしれない。芭蕉はこれとの等類を気にして「あな」を「あら」に直したということも考えられる。

この後の「大まはし」の用法については、伝宗祇の「連歌諸妹秘伝抄」(前掲古典文庫一一三)の「発句の切字」の後に付せられた説明に具体例が示される。

此外、大まはしという事あり、物の名をみつ入候へば切字なくとも苦しからぬよし古人の申候ひき、

五月雨は嶺の松風谷の水(撰政殿)

かやうのたぐひにて有べく候、

これが先の「長短抄」を受けたものであることは「五月雨」の句が一致するからである。

三

この連歌における切字を入れずに発句をなす手法を俳諧に取り入れたのは貞徳の跡を受けた北村季吟である。季吟の俳諧論の主要は「埋木」にまとめられている。「埋木」には二種類あり、それは「季吟俳論集」(古典文庫一五一)昭和三十五年二月十五日発行編者尾形仿)収められている。その一本は、

丙申睦月初五日重校舎之 門弟 季吟

同五月十四日謹写之 元隣

延宝元癸丑冬吉日 寺町二条上ル町

開板

との奥書を有する刊本であり、今一つは、芭蕉への伝授本で、末尾に、

右一册先年巳雖書記以有當時不用之儀今改而示學者也

延宝元年十月良辰

此書雖為家伝之深秘宗房生依誦諸執心不淺免書写而且加奥

書者也必不可有外見而已

延宝二年弥生中七 季吟(花押)

とある。刊本の奥書にある「丙申」は明暦二年(一六五六)であり、延宝元年(一六七三)に板本として公刊するまで、十八年にわたって、季吟はこの伝本によって門人に教示してきたのである。この家伝の本を出版して一般に公開し、それに「不用之儀」があるとし、これを改めて、新しい伝授本を作ったのはどうしたわけ

であろうか。

寛文の末年は季吟の指導する貞門俳諧は、新しく抬頭した宗因一派の談林俳諧に圧倒される兆候が十分にあった。身近では季吟にはくまれた伊賀俳壇が寛文六年四月二十五日に藤堂家の後継者である良忠(俳名蟬吟)の急逝によつて崩壊の危機におち入り、その中心をなす宗房こと芭蕉も寛文十二年一月二十五日に従来の式作法を無視した俳諧合「貝おほひ」を興行し、翌十三年には宗

因の一番弟子西鶴が「生玉万句」を成就するなど、貞門派にとつては手痛い風潮が渦を巻いた。その中で最も季吟を不安におとし入れたのは延宝二年三月に、宗因の『蚊柱百句』に対する貞門派からの批言書「しぶうちわ」が「去法師」の匿名で出版されたことである。「蚊柱百句」の成立は不明で刊年もしられぬが、古典

俳文学大系4「談林俳諧集」に収められた同書の解題を記した乾裕幸氏は「寛文十三年以前」と推定された。或いは芭蕉もこれを見て「貝おほひ」をなしたかもしれない。年代は少し遅れるが、『蚊柱百句』の前文に見える「蚤の息も青雲天上にのほり、蚊のほそ声は貴人の頭上にとゞまる」の文言は、松本家所蔵の「栗津文庫抄」所収の芭蕉の俳文「杵の折れ」に、「むかしハ横槌たり。今ハ花入と呼びて貴人頭上の具に名を改む」と引用されている。私はこれを元禄四年一月と推定し、拙著『註本芭蕉俳文句文集』(弥吉膏一・西村真砂子・檀上正孝氏らとの共著、昭和五十二年三月三十日発行清水弘文堂)収めた。その外ここには省略するが、貝

おほひ』の文言に「蚊柱百句」の句からと思われる個所が何箇所も見られる。尚これも推定であるが、『俳文学大辞典』(平成七年十月二十七日発行角川書店)の「しぶうちわ」の項を執筆した乾氏は匿名の「去法師」は実は季吟であるらしいとの風評のあったことを記している。それは岡西惟中の『破邪顕証返答』(前掲談林俳諧集二)の左の文章である。

その比、京都季吟子もとより、いまだ返答書を替もはてぬうちに、備州岡山風及がもとへ、季吟子書通して、「かの」しお団、我つくりたるにあらず、もし返答をもせば、季吟作也など、書む事、おほけなき事也」と書し一通、今に予が所持しける也。是ほど流布の書のみぬと書るは、汝が不才の頭たる所也。

これによると、「しぶうちわ」は公刊当初から季吟の作だとの風評があり、それに当惑した季吟はそれは自分ではないとの書簡を岡山の風及に送つたとの事、これは信じてよいと思われる。公平に両者を比較すると、『蚊柱百句』は道理にはずれない飛躍をもって俳諧の本領とするのに対し、「しぶうちわ」は、言語表現の正常な接続をモットーとして、前者の不合理性を追求したのである。単的に言うとう好いたことをして遊ぶのが俳諧だとするのが宗因風であり、たわ言滑稽の語をもって道を正すのが俳諧と主張とする貞門との世界観の相違が両者の確執となつて現れたのである。宗因風の抬頭によつて季吟がもっとも恐れたのは、永年培つて

きた自派の勢力の侵害されることであつた。殊に伊賀俳壇は、藤堂良忠の俳号を蟬吟とすることによって知られるように、季吟にとって最も信頼のおける弟子筋であつた。その伊賀俳壇が蟬吟の死によって、離反する兆候を示した。それを端的に示したのが宗房こと芭蕉の興行した「貝おほひ」であつた。「貝おほひ」の序に芭蕉は、

小六ついたる竹の杖。ふしぐく多き小歌にすぎり。あるははやり言葉の。ひとくせあるを種として。いひ捨てられし句共をあつめ。右と左にわかちて。つれおしにうたはしめ。其かたはらにみづからが。みじかき筆のしんきばらしに。清濁高下をしるして。三十番の発句あはせを。おもひ太刀折紙の。式作法もあるべけれど。我ま、氣ま、にかきちらしたれば。世に披露せんとにハあらず。名を貝おほひといふめるは。あはせて勝負をみる物なればなり。又、神楽の発句を巻軸にをきぬるハ。歌にやハラぐ神心といへば。小歌にもがこ、ろざすとこの誠をてらし見給ふらん事をあふぎて。

当所 あまみつお、ん神の御やしろの手向ぐさとなしぬ。
寛文拾二年正月廿五日 伊賀上野松尾氏前 釣月軒にして、
ミづから序す。

と記した。ちなみにこの発句合を興行した正月廿五日は、天満宮の祭神菅原道真が筑紫の太宰府に流された昌泰四年（七月十五日）延喜と改元（九〇二）一月二十五日に当る。道実は延喜三年二

月二十五日に没した。よつて天満宮では毎月二十五日をもつて例祭とした。芭蕉の「貝おほひ」もそれに合せたのである。

芭蕉はこれを期に藩を辞し、俳諧師となるべく江戸に下り、江戸で「貝おほひ」を出版した。俳諧師となるならば、師の季吟の居住する京都へ出るのが順当である。なぜ芭蕉はそれを避け、まだ発展途上にある遙かな江戸を選んだか。それは、「貝おほひ」の内容が師の教えに沿わないことをうすうす察知していたからではあるまいか。芭蕉は序文に「式作法もあるべけれど。我ま、氣ま、にかきちらしたれば」と記した。この「式作法」に従うのが季吟の教えであつた。季吟は刊本となした「埋木」に、

しかあれど未練の滑稽進師（まじり）にはいかいハ何の作法もあらぬものによいかなるべきかしらずかしなどあさ
はかにいひみたらんハいと口おしかるべきわざなればよく定
めをきてを。わきまへたらん何のさまたげ有べきぞやたゞ大
かたにかく心得みたらんハかのわらひをまぬがる、にひとつ
のたすけにこそ待らめ。

と「作法」をよく知ることをざと知っている。芭蕉の「式作法もあるべけれど我ま、氣ま、にかきちらしたれば」という態度は、明らかに師の教えに違反する。季吟としては芭蕉のこの手法に一言あるべきであつた。芭蕉もこれを察して、師の元を去つたのではあるまいか。しかし、季吟は「貝おほひ」を叱正せず、逆に「埋木」を改訂して、新しく伝授本を策定して、延宝二年三月七日を

もつて秘伝として芭蕉に授けた。これは芭蕉の才能を見込んで自派から離れさせまいとする寛容な態度によるものではなかったか。芭蕉としても、主君と共に学んだ師から去るに忍びなかった。芭蕉が季吟と方向を異にしながら「埋木」の伝授を受け入れたのは、両者の妥協にあつたのではないかと考えられる。

四

芭蕉が江戸に去つてからも季吟を師として尊敬していたことは、延宝八年仲秋の嵐亭治助の序を持つ其角の自句合「田舎の句合」に見られる。

第六番

左

一一 俗にいふうぶめ成べしよぶこ鳥 農夫

右

一二 駕に乗て春を送るに白雲や 野人

喚子鳥、予、先年、吟先生にま見えて、此事を尋待れば、伝受の事、俳諧にせん事無用の由。又、うぶめ、李時珍が説に姑獲鳥とかけり。鳥と云字によせて、おもひ出られ候にや。猶批判成がたし。且、右の句の駕にのつて無窮の空々たるに、逍遙せん事、楽猶窮なかるべしや。

ここに「よぶこ鳥」と言われるのは、「古今集」に詠まれた「百千鳥」「稱負鳥」と共に、古来正体不明であつてその内容が秘伝とされ、伝授者以外に使つてはならないとされていた。これが俳

諧にはどのように受容されていたであろうか。貞徳の「俳諧御傘」には次のようにある。

呼子鳥 古今の大事なれば、伝受せざる人はむさとはせぬ事

なりと、近代連歌師は制するに候。俳諧には伝受せずとも正体をしらずとも春の暮かたになく鳥也と心得てすべし。(下

略)

これによると、連歌には古今の三鳥は古今伝授をせぬ人は絶対に使つてはならないとされてきたが、俳諧では多少制約をゆるめたようである。季吟はこれを貞徳から教えられ、芭蕉は更に季吟の教えを守つて、其角の「田舎の句合」の判詞としたのである。同様なことを芭蕉は伊賀の門人にも語っていた。土芳の「三册子」わすれみづ(くろさうじ)に、

呼子鳥の事、師のいはく「季吟老人に対面の時、「御傘」に、春の夕ぐれ稍高きて鳴鳥と思ひて句をすべしと在。貞徳の心いかに」とたづねられしに、老人のいはく「貞徳も古今伝受の人とはミへず。全、句をせざる事也」といへるよし」、師の咄在。

とある。貞徳は「御傘」において俳諧は連歌の規定を多少ゆるめてもよいという意向を示したが、事实上は連歌以来の伝統を堅く守つていたと季吟は判断したのである。そしてその姿勢を踏襲するように芭蕉に説き、芭蕉もその教えを順守したことを「三册子」の記述は伝える。

芭蕉は蕉風の独自性を確立するために、若い時に心酔した貞徳の俳風から脱却するために宗因に接近した。そのことは、「去來抄」修行に、魯町の「不易流行の事は古説にや。先師の發明にや」という質問に答えた去來の言葉に、

「長頭丸（貞徳の別名）以来、手を込る一体久しく流行し、（中略）然りしより此かた、都鄙の宗匠達、古風を用ひず、一旦流々を起せりといへども、又其風をながくおのが物として、時々変ずべき道をしらず。（先師、はじめて俳諧の本体を見つけ、不易の句を）立て、又風が時々に変ある事をしり、流行の句と分ち教へ給ふ。然ども先師常に曰、上に宗因なくむバ、我くがはいかい、今以貞徳が涎をねぶるべし。宗因は此道の中興開山となり。」

とある。これは去來の伝えであるが、芭蕉が貞徳の俳諧を否定したように受け取れる。しかしこれは俳諧を不易流行の立場から述べたものであつて、必ずしも貞徳の存在を無視したものではない。芭蕉は貞徳を俳諧の創出に當つて欠くべからざる人物であると認識していた。芭蕉は、元禄八年熱田の東藤編の「熱田躰宮物語」に、貞徳・宗鑑・守武の三翁の肖像の贊を望まれ、一文を草したことが記される。これは「三聖図の贊」と呼ばれているが、題がつけられていないので、その前後を補つて、「躰宮物語」より引く。

（前略）一とせ、此所にて例の積聚さし出て、薬の事、医師起倒子三節にいひつかはずとて、

薬のむさらでも籍の杖哉 翁

其起倒子が許にて、躰齋老人のうしろむける自画の像に、

困扇もてあふが人のうしろつき うばそく 芭蕉

とかきてをくり給ふ。又貞徳・宗鑑・守武の画像に東藤子讚を乞けるに、何を季になにを題に、むつかしの讚やとみたまひ、やがて書てたびけり。その句其こと葉書。

三翁は風雅の天工をうけ得て、心匠を万歳につたふ。此かげに遊ばんもの、誰か俳言をあふがざらんや。

月華の是やまことのあるじ達 芭蕉翁

とかたりければ、句毎の意味、いやおもしろく、勘破しがたくおほえ侍る。

この「三翁云々」の言葉は芭蕉の談話のうちに引かれているが、実際に賛として揮毫したものが現存する。それは「新編芭蕉大成」の口絵の第一頁に原色そのまま「宗鑑・守武・貞徳像」真蹟画賛」として掲載されている。これには芭蕉の俳文の下に三人の像が書かれているが、この「三翁」が誰であるか、このままでは分らない。同じ発句が寛政十三年（一八〇一）刊秋屋編「花はさくら」に許六の絵に賛したものに載っている。これは、宗祇・宗鑑・守武の像に賛したもので、貞徳が省かれている。先の「三聖図の賛」は、貞享二年（一六八五）春の『野晒紀行』の帰東の途次と考えられるが、後の賛は、元禄六年（一六九三）三月の許六の近江への帰郷の折に書かれたもので、この八年の間に芭蕉の貞徳へ

の評価が変つたのであろうか。しかしそう考えるのは早計に過ぎる。この俳文で見逃しがたいのは「誰か俳言をあふがざらんや」としめくくつた「俳言」である。

貞徳は連歌と俳諧を隔てるものが俳言であつたことを実例で示している。俳言とは雅言を主とする連歌に対し、漢語・俚言・俗言などを網羅した庶民の実用語であつた。その使用例を「御傘」より引く。

○例ならぬに例にたがふ、煩わづらひの事也。声によむ詞ながら連にもする也。俳言にも成也。連に一あれば、準例不例など、いひかへて二有べき歟。病煩などにはおなじ面を可べ嫌也。御寒中風など申病の名には三句去べし。

○箭や一年の矢一、連に二あれば誹には矢はぎ矢立賀茂矢管はつなどの類の誹言今一折をかへてある也。

○いぬ桜 春也。植物也。是は桜に似たる木にて花もさかず。又さけ共らいさき花にていやしき木也と云々。然るを大筑波にもく、りしていざみにゆかん犬桜など、まことの桜のやうに用いられたり。誤か覚おぼ束つかなし。但俊頼とし頼の哥うたに山陰やまかげにやせさらばへる犬桜追はなたれて引人もなし。如此あれば、誹言にはあらざるべけれ共、連歌れんがに終はに聞きざる物なれば誹言に成べし。

これらを通観するに、貞徳の言う「誹言」とは、連歌には使われぬもの、或はめつたに使われぬものを拡充して使う例として貞徳

はそれらを注記したものと思われる。この背後を探れば、誹言とは、上流階級の専有であつた連歌を用語の面で拡充して庶民階級にも普及させた一種の言語革命であつた。その意味で、俳諧を、犬筑波」と称した宗鑑の発想を受けて、貞徳が「新撰犬筑波集」を選び、更に季吟がそれを踏襲して「新統犬筑波集」なした流れは重要視すべきである。

芭蕉が若い時から貞徳を尊敬していたことは寛文五年（一六六六）十一月十三日に蟬吟の催した貞徳十三回忌追善俳諧に参加したことによつて知られるが、蟬吟没後その制約を逃れ、自由の俳諧を鼓吹する宗因の談林俳諧に接近した。しかしその方向性が速吟性を得意とする西鶴に見られるように放埒を極めたものであつたためにそれとも別離し、文芸の伝統に即する誠の俳諧を確立した。その基本として若年時に習つた季吟の俳諧の作法を捨てなかつたのである。

五

芭蕉の日光での発句「あらたうと青葉若葉の日の光」が連歌以来の「大廻し」の手法になつたものであることは既に述べた。この条では中下の「木の下闇も日の光」を「青葉若葉の日の光」に直した経緯について考えてみようと思ふ。

先に梵灯庵主の「長短抄」に見える「三体発句」の例、「アナタウト春日ノミガク玉津嶋」の句が、芭蕉の「あらたうと青葉若

葉の日の光」に非常によく似ていることを指摘したが、この句が季吟の「俳諧進正集」(古典文庫一五一季吟俳論集)にも載っている。

○へ大廻之事 連歌に、

へあなたうと春の日みがく玉津島

是心にて切発句にて候。上下の分別なり。下に玉津嶋と有。

此都合を大廻しと申候也。師説に候へども、玄妙・大廻し等

の句は、好むまじき事被申候き。

【俳諧進正集】は巻尾に、

万治元年十二月晦日、以半松齊之秘決、交写之。同日一校合畢。季吟

とある。万治元年(一六五八)は「埋木」の成った明暦二年の二年後であつて、内容的に「埋木」を簡略化したものである。この説明はやや明確を欠くが、「分別」とは発句の五七五を分けることで、下の句「玉津島」が大きく廻つて、上の句の「あなたうと」につながる手法を指したものである。この手法は刊本の「埋木」には、次の如く見える。

へ大廻切 つねハすまじき事也

へたまりやせぬたまりやいたさぬへ花の露

たまりハせぬ花の露とまハる也。

この「たまりハせぬ花の露とまハる」は難解であるが、要するに「たまりハせぬ」の上の句は下の句の「花の露」と廻る、つまり

接続する意味であつたらう。つまりこれは特別であつて常にせざる手法であつた。

この「大廻し」の手法は芭蕉への伝授本では用例が変えられている。その発句切字事に、さまざまな切字の用法を列挙した後、大まはしの切字

あなたうとけふのたうとさ若夷

とある。これは先の刊本の「埋木」の例とは異にし、「あなたうとけふのたうとさ」と「たうと」を繰り返し、芭蕉の日光の句の發想の元になつたと考えられる。「若夷」は、元日の朝早く門に貼つて歩く夷神の札のことである。この若夷が上の句に廻つて切をなす。これが「大まはし」の手法である。伝授本を他に見せることは「不可有外見」として他に見せることを禁じられていたから、これは芭蕉のみが知っていた句であり、これが芭蕉の日光の句の例となつたことは疑いのないことである。

六

次はこの日光の句の推敲課程の吟味である。この句は既に明らかにしたように次の六回の変遷を経てゐる。

1あなたふと木の下暗も日の光(曾良書留)

2あらたふと木の下闇も日の光

元禄二年四月十四日揮毫高久家所藏

3あらたふと木の下闇も日の光

元禄二年四月下旬杉風宛曾良書簡

4 あなたふと青葉若葉の日の光

伝芭蕉自筆の「奥の細道」中尾家所蔵

5 あなたふと青葉若葉の日の光

曾良本とその訂正天理大学影印

6 あらたうと青葉若葉の日の光

素龍自筆芭蕉の「奥の細道」の最終稿本

このうち4の「芭蕉自筆奥の細道」は内容に疑問の個所が多く、芭蕉の自筆説が疑われているが曾良本がそれを写した形跡があるので一応入れて置いた。

この推敲課程でまず注意されるのは、「あな」が「あら」に変えられたことである。「あな」は、季吟の伝授本から受けたもので、曾良の「書留」に見えるので初稿と見てよいであろう。しかし間を置かず高久角左衛門方での真蹟に「あら」とあり、殆ど同時の発信と考えられる、杉風宛の曾良書簡にも「あら」と記されていることよって、芭蕉が早い段階で「あな」を「あら」に変えたことは確実である。しかるに「奥の細道」の芭蕉の自筆とされる中尾本に「あな」が採用されているのは間違いである。芭蕉はその写しである曾良本にわざわざこれを朱筆で消して「ら」としたのはなるほどである。これによっても中尾本が正しい「奥の細道」でないことが知られる。

次は「木の下闇も」を「青葉若葉」に変えたことである。「御傘」

の「くらきと云詞」の条に

夜分也。乍去雨ぐらき雲くらき木のくくらき家の内くらきなどは目くらきなどは夜分にあらす。

と注されている。また「木の下闇」の言葉が俳諧に頻繁に用いられたことは、同じく「御傘」の「闇」の条に、

此内に木のくくらきなどは木のくくらき共いへば二句可嫌也。闇くらき夜辭には七句さるべし。

とあり、「木のくくらき」は俳諧の常用語であったことが知られる。ここで芭蕉の表現のポイントは「木のくくらき」の「も」にあってと見るべきである。「も」一般には係助詞に分類され、その用法は「岩波古語辞典」(一九七四年〈昭和四十九年〉十二月二十五日発行大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編岩波書店)の「基本助詞解説」の「も」の条によれば、係助詞に分類され、

承ける語を不確実なものとして提示し、下にそれについての説明・叙述を導く役目をする。

と説明される。然るに芭蕉の場合は、本来ならば木のくくらきは周辺と同じく小暗くあるべきなのに、それとは正反対の明白白なる「日の光」をもってした。この矛盾は、芭蕉が東照宮の光被を強調するためではなかったかと思われる。それは東照宮への挨拶である。しかし俳句としては実景とは異なっていた。それは多分に観念的である。それで、「木のくくらき」を現実の御山の景観である「青葉若葉」に変えた。この訂正は見事である。

日光の金山を覆う樹木を青葉と若葉に重層させたのは、その御山の歴史をも類推させる。それはその前文の「往昔、此御山を「二荒山」と書しを、空海大師開基の時、「日光」と改給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此光二天にか、やきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穩なり。」の文章にもマツチする。芭蕉は東照宮に祭られた徳川家康へのおもねりをも超えたのである。

ここで最後に季語としての「青葉若葉」の効果に触れておく。

芭蕉以前の連歌にもまた俳諧にも「青葉」と「若葉」を重ねた句を見たことがない。これは芭蕉の独創であろう。「青葉」は当時の連俳では無季で雑の扱いを受けていた。その証拠に木食上人の「無言抄」に「非季詞」とされている。その説明に「花をむすびては春なり」とある。青葉は樹木としても松杉の如く常緑樹もあり、草も青葉に萌える。しかるがゆえに一定の季節に限定され得ない。しかしそれは理屈であり、青葉といえ、樹木の葉が萌え茂る春夏を思わせる。貞徳の「御傘」には、「葉字」の条に、

草の葉竹の葉等可_レ隔_二五句_一也。如此新式に一_レ座四句の物の所に出せり。はいかにはえうと声によむ句もまじりて、一_レ座に五句ある也。この葉と出すは木の葉の事也。若葉青葉一_レ葉わくら葉落葉もみち葉等の事也。

とあり、「若葉」と「青葉」が連続して使われている。また「花に若葉を結ぶは」の条には、

夏也。青葉なれば春也。

として、青葉に花を結ぶことによつて春季を持たせている。一方無条件で「青葉」に季を認めているのは、慶長四年（一五九九）成立の「連歌新式増抄」である。その「若葉」の条に、

若葉……青葉は春也。わかばのはな夏、只木といはで葉とするは、一葉おち葉わかば青葉などはかりなり。あをばも木のるいしてよかるべき歟。秋のはといふも、秋の季にて木をもたする心なり。（寛文五年八月日長尾平兵衛撰）

とあり、「無言抄」と意見を異にする。「青葉」と並んで登場する「若葉」ははっきり季を持つ。「御傘」の「若葉」の条を引く。

若葉 春夏有_二両説_一。加_レ花者為_レ春。然而夏季大切之間可_レ為_レ夏云々。この新式の文章をみれば、花を結ばぬ句は皆夏といふ義也。これは木の若葉也。草の若葉は春になる也。

この「春夏有_二両説_一。加_レ花者為_レ春」とは二条良基の「連歌新式」によつたもので、連歌の初期から春とも夏ともされていたのである。芭蕉が日光において「青葉若葉」を春から夏に転換する卯月朔日の吟としたのは、この連俳の「若葉」を春とすべきか夏とすべきかの混乱を見事に折衷したものと言わねばならない。

芭蕉が「青葉」と「若葉」を使い分けた例がある。それは「奥の細道」に先立つ「笈の小文」に見える。貞享五年四月初め、東大寺の大仏殿の匏始にあうために急拠紀伊の和歌浦から奈良に駆けつける。そのついでに鑑真和上のゆかりの寺唐招提寺を訪れ、

その旨目の尊像を拝観する。その折の記事が乙州本の『笈の小文』に見える。

招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十餘度の難をしのぎたまひ御目のうち塩風吹入て、終に御目言させ給ふ尊像を拝して、

青葉して御目の筆ぬくはゞや

乙州は『笈の小文』の出版に際して自分だけに芭蕉はこの紀行文を残したと記しているが、実はこれには異本があり、三種類が知られている。その異本（雲英本）に発句が、

青葉して御目の筆拭はゞや

となっており、また元禄八年刊支考の『笈日記』にも、

青葉して御目の筆拭ばや

ともあり、芭蕉はこの句の初五句を「青葉」とも「若葉」とも両様によんだことが知られる。とすると芭蕉の念頭には青葉も若葉も同じように記憶されていたかもしれない。その両者を合体して春から夏への季節の移りを効果的に表現したのが、『奥の細道』の日光の条の「あらたうと青葉若葉の日の光」だったのではあるまいか。

（あかはね まなぶ 岡山大学名誉教授）

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅱ

大阪大学 日本学報（大阪大学大学院文学研究科日本学研究室）
三十一

大妻女子大学草稿・テキスト研究所 研究年報 四

大妻女子大学紀要——文系——（大妻女子大学） 四三

大妻国文（大妻女子大学国文学会） 四二

岡山大学 国語研究（岡山大学教育学部国語研究会） 二二五

香川大学国文研究（香川大学国文学会） 三五

學習院大學國語國文學會誌（學習院大學國語國文學會） 五四

學術研究——國語・国文学編——早稲田大学教育学部 五九

学大国文（大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座） 五四

活水論文集 現代日本文化学科編（活水女子大学） 五四

金沢大学 国語国文（金沢大学国語国文学会） 三六

北九州市立大学 文学部紀要（北九州大学文学部 比較文化学科） 八〇

北九州市立大学文学部紀要（人間関係学科）（北九州市立大学文学部） 一八

鴨東通信（思文閣出版） 八〇、八一、八二、八三、八四

汲古（汲古書院） 五九、六〇

紀要 言語・文学・文化（中央大学文学部） 一〇七、一〇八